

[学術論文]

# 中国の高等教育機関における日本語教育と学習者の一側面

— 遼寧省の大学を事例に —

Japanese-language Teaching at Chinese Institutions for Tertiary  
Education: The Case of a College in Liaoning Province

山 田 陽 子

Yoko YAMADA

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 15

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 15号

2011年6月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JUNE 2011

[学術論文]

## 中国の高等教育機関における日本語教育と学習者の一側面

—遼寧省の大学を事例に—

### Japanese-language Teaching at Chinese Institutions for Tertiary Education: The Case of a College in Liaoning Province

山田陽子  
Yoko Yamada

- 1 はじめに
- 2 日本語教育概観
- 3 課外日本語活動
- 4 まとめ

**要旨** 本稿は、中国の高等教育機関を一事例として、課外日本語活動および日本語教授方法の関連性から日本語教育上における教師に関する課題を検討するものである。大学の専攻日本語学習者に対するインタビューと質問紙調査、中国人教員とネイティブ（母語話者）日本語教員、大学生に対する参与観察を実施した。

調査の結果、中国人教員が基礎知識、日本人教員がコミュニケーションや会話実践を重視するという両者の相違点を学生たちが認識していることが判明した。中国高等教育機関の日本語教育上の教師に関する問題として、教授能力、日本語能力、教授法情報の不足があげられている。このような教師に関する課題から、学生の日本語能力向上のためのひとつの方法として課外日本語活動を検討した。

課外日本語活動から見てきたことは、日本語能力向上のためにはネイティブ日本語教員の専門性と特性を生かした積極的な関与が重要なことである。課外日本語活動が正規授業を補強する役割を果たすためには、専門性の高いネイティブ日本語教員が企画段階から関与し、コミュニケーション能力とことばの運用力の育成をはかる教授方法の特性を最大限に生かすことが重要と考えられる。今後は、中国人教員に対することばの運用力育成のための実践的な研修の取り組みと高等教育機関内での日本語教員の専門的な人材養成が必要である。

**キーワード**：中国、大学、日本語教育、課外日本語活動、教授方法

## 1 はじめに

### 1. 1 研究調査地の概要

世界における日本語学習者数は、今や300万人といわれている。その内、中華人民共和国（以下、「中国」）における日本語学習者は684366人である（国際交流基金、2006）。中国では初等教育・中等教育での日本語学習者も少なくないが、圧倒的に高等教育機関で学ぶ日本語学習者が多い。たとえば、中国の高等教育における日本語教育機関数は、2003年度では475、学習者数205481人であったが、2009年度では機関数が1117、学習者数556108人（国際交流基金調査）と、6年間に高等教育機関数・学習者数ともに飛躍的な増加を見せている。

さて、本稿の調査地である中国東北地方遼寧省は、人口が約4173万人（在瀋陽日本国領事館、2004年度）である。省内では54（国際交流基金調査、2009年度）の高等教育機関で日本語教育が行なわれている。遼寧省における日本語教育の盛んな都市は大連市と省都の瀋陽市の二市である。遼寧省に存在する高等教育機関の実に40機関（74%）を二市で占めている。

大連市と瀋陽市は旧満州国時代<sup>1)</sup>の政治や文化の中心的地域であった。2010年現在、遼寧省には大連を中心に多数の日系企業が存在し、大連だけでも5000人近くの日本人が居住している。中国人大学生を採用する日系企業も少なくない。

歴史から言語を見れば、中国東北地方は大日本帝国の植民地とされ、支配する側の要請による日本精神を体得させるがための言語教育として「日本語教育」が推進されたところである。日本語教育が組織的に行なわれ始めたのは、大連市の北に位置する金州であった（《日語学と日語教育研究》編集委員会編、2003、287）。いわば、遼寧省は中国の日本語教育においては古くからの歴史を有する代表的な地域であるといえよう。

### 1. 2 先行研究と本稿の位置づけ

中国の大学における日本語教育は大きく分ければ、専攻日本語学習者に対するものと非専攻日本語学習者に対するものがある。これまで中国における日本語教育に関しては、中国内陸部における調査に基づいた非専攻日本語学習者に対する日本語教育の報告（案野・谷部、2010）がある。そのほか、大連地域を中心に日本語教育の現状とe-learning教育<sup>2)</sup>についての報告（宋、2010）が中国建国以降の沿革を振り返りながらなされているが、中国東北地方の個別の高等教育機関の事例研究や専攻日本語学習者に関する実態調査はそれほど多いわけではない。そのために中国の個々の大学における日本語教育の課題が見えにくい。中国の大学は、国立・民営など組織的な相違や地域性による相違点が多いため<sup>3)</sup>、個別調査も重要であると考えられる。

また、国際交流基金の調査<sup>4)</sup>から、中国高等教育機関の日本語教育上の教師に関する問題として、教授能力と日本語能力が不十分であることがあげられ、教授法情報不足が問題点比率

51.9%と高い数値を示している。このような日本語教育上の教師に関する課題を検討し、学習者の日本語能力向上に寄与するには、どのような方法が考えられるのだろうか。

中国の大学は、日本の多くの大学とは異なる独特の全寮制が大部分を占める。学生が学内敷地で共同生活を送るということは、正規授業後の夜の時間帯共有を確保しやすいといえる。授業時間以外の課外活動や行事も多い。中国の日本語教育は、このように正規授業だけではなく、課外における日本語活動も含まれるのが特徴である。しかし、これまでの先行研究では、日本語指導の重要な側面を担う課外活動に焦点があてられてこなかった。大学生の正規授業だけではなく、課外の日本語活動も含めた日本語学習実態の全容から日本語教育を考えることが必要となろう。

本稿では、中国遼寧省の国家重点大学であるX大学（仮名とする。以下同じ）における日本語教育（大学院を除く）を一事例として、これまでの先行研究であまり取り上げられてこなかった課外日本語活動および教員の日本語教授方法との関連性から、先述の教師に関する課題について検討したい。研究方法は専攻日本語学習者へのインタビューおよび質問紙調査、中国人教員、ネイティブ（母語話者）日本語教員、学生に対する参与観察である。

## 2 日本語教育概観

### 2.1 学習環境

X大学は国の中央教育部の統一管理下にある総合大学で、教学および教育監理は中国の国家中央教育部の統一規定に従ったものである。9月に入学し、翌年1月までが前期、2月の春節休暇をはさみ、3月から7月までが後期である。X大学外国語学院は英語系、日語系、ドイツ語系、ロシア語系の4系（学科）から成る。それぞれの学科には外国人教師が配置されている。大学独自のルートで採用する場合と中国政府の外国専門家局を通しての招聘とがある。

X大学外国語学院日語系は1999年に設立された。1年生から4年生まで各2クラスずつの8クラスある。日語系学生数の合計が約220名で、その内の男子学生は約60名、女子学生は約160名と、女子学生が実に73%を占めている。一方、日語系教員数は15名（客員を除く）で、その内の2名がネイティブ（母語話者）日本語教員である。筆者は2010年4月から11月までの7カ月間、X大学外国語学院日語系において1年生から3年生までの日本語科目の授業に参与観察者として加わった。学生へのインタビューは日本語使用を中心とし、低学年の日本語能力が高くない学生には日本語と中国語を話せる学生の通訳で行なった。調査対象の学生は中学から日本語学習を行なっている少数者を除き、大半が大学入学後からの日本語学習者であるため、日本語学習歴は大学在籍年数とほぼ同じ学習歴（1年から3年）の者が多い。学生全員が大学寮で共同生活している。X大学で2010年の秋、日本語を学ぶ大学4年生数人（日本語能力試験1級取得者）と言語をめぐる討論をした際、学生のひとりが次のように語っていた。

大学に入り、寮で中国のあちらこちらから来た学生と話をしたら、まったく話が通じなかった。かなり経ってからやっとお互いの言うことがわかるようになった。

中国の全土から学生が集まって来ているX大学では、学生同士が話すとき、同じ中国語の使用とはいうものの、出身地域特有の言語で話すため、まるで違う国の言語のように聞こえたことを述べている。ちなみに、X大学では1クラス(25名)に1~2名の朝鮮族の学生を除いて大部分は漢族である。同じ漢族といっても、中国は「漢民族の約半分が『漢語』で交流できない多民族国家」(山本・河原、2007、81)といわれる。

大学生の履修科目は、大きく分けて専攻科目と公共科目と体育科目の3つが中心である。「専攻科目」は日語系の場合、「文法」、「会話」、「聴解」、「読解」などの日本語科目を履修することになっている。「公共科目」は、法律・健康教育・心理教育などの必修科目である。一般常識を身につけるための科目で、大学生の価値観や人生観を形成するために必要といわれる。「体育」では、学生が競技種目を選択する。特別な選択科目の場合、土曜日や日曜日に開かれる場合がある。また夜間にも特別授業(コンピュータ科目)が開講されている。日語系学生は言語科目の授業で、専攻の日本語、第二外国語の英語、さらには選択科目の韓国語を学習する。

X大学日語系2年生52名の内、2年生修了と同時に日本に留学する学生は7名(2010年度)という結果で、わずか14%程度にすぎない。中国遼寧省では毎年、大連市と瀋陽市を中心に市レベル・省レベルの日本語スピーチ大会(高校・大学生対象)が開催される。出場学生の大半は、未だ見ぬ日本を頭に描きながら日本事情をテーマにスピーチを競い合っているのが現状である。

本稿で取り上げるのは、以上のような大学日語系の学習環境下で行なわれている日本語教育であることをまずおさえておきたい。

## 2. 2 日本語学習の現状と課題

学生が授業時間以外にどのくらい日本語の自習を行なっているのか、日語系2年生51名(全52名、1名欠席)の回答結果を集計し表にまとめた。

<一日の自習時間は何時間ですか。そのうち、日本語学習時間は何時間ですか。>

表2のように、2時間、続いて3時間の自習時間が最も多かった。その自習時間の大半を専攻の日本語学習に充てている。自習時間に行なう日本語学習では、「書く」こと、「読む」ことが中心で、とりわけ2年生は日本語能力試験受験を目指した筆記対策としての日本語学習を行なっている。相手を必要とする会話学習を行なう機会が少ないために日本語会話を苦手とする学生が多い。日本語の自習時間を確保しても、日本語運用能力の向上には直接的に結びついていない。

表2 自習時間

総学習時間（自習）		日本語学習時間
時間	（人数）	（人数）
1	3	6
2	21	21
3	16	16
4	10	7
5	1	1
合計	51	51

中国では1993年より日本語能力試験が開始され、2006年には日本語能力試験の申し込み者数が20万人を突破した（国際交流基金、2009、29）。大学日語系においては、日本語能力試験は中国にある日系企業への就職や日本留学の指標として活用されるため重要である。ちなみにX大学の大学2年生52名（全員）の希望する進路は、表3のように就職希望が約58%、大学院志望が約42%という結果になった。

表3 大学卒業後の希望進路

大学院へ進学したい	22
就職したい	30

合計 52（人）

続いて、授業時間についてだが、1科目2コマ（100分）ずつで、50分のあと10分の休憩をはさみ、続きの50分授業を行なう。1年生と2年生の各授業時間割は以下のようなものである。1限目は朝8時から開始され8限目の午後6時に終了する。

1年生〈授業時間割〉（後期2010年3月～）

各授業は2限ずつ（50分授業+10分の休憩+50分授業）

（会話テキストは「みんなの日本語」を使用）

	月	火	水	木	金
1	精読	精読	精読	聴解	聴解
2					
3	聴解	会話		精読	精読
4					
5	会話		聴解		会話
6					
7				会話	
8					

## 2年生&lt;授業時間割&gt; (後期2011年3月～)

(会話テキストは「新日本語の中級」を使用)

	月	火	水	木	金
1	会話	精読	会話	精読	
2					
3	精読	聴解	日語	聴解	
4					
5	英語	英語			精読
6					
7			精読		
8					

時間割を見れば明らかなように、日本語科目の中で最も多いのが「精読」の授業である。X大学日本語系では、一般的に週あたりの担当授業コマ数は、中国人教員も日本人教員もおおよそ12コマ（1コマ50分）である。学生は中国人教員と日本人教員の両者から日本語科目を受講する。一般的に中国人教員は「精読」、日本人教員は日本語の「会話」と「聴解」の授業コマ数が多い傾向にある。「精読」では、授業前に教科書の作品を朗読し暗誦する学生が多い。相手が必要な「会話」と違い、「精読」は学生にとり最も自習しやすい科目である。先述の日本語自習時間の大部分を学生は「精読」の予習、多くは文章の丸暗記に費やしている。「精読」の教材には、日本の小説、随想、評論、詩歌の代表作品でまとめられたX大学独自の教科書が用意されている。「精読」の学習目標は、日本文化を学ぶこと、文学作品を深く理解すること、登場人物の心情の変化を読み取ること、論点をまとめる力の養成、作者の主張に対する自らの考えを発表できること、表現上の特色を説明できることなどとされる。「精読」の授業で教授するのは、日本の文学作品と作者に対する知識だけではなく、作品全体を深く読み解くことで日本文学の特徴・作者の意図を理解することである。

X大学日本語系の中国人教員13名の多くは、日本文学、経済学を専攻としており、精読の学習目標に沿った授業を展開できるが、日本語教員としての専門性は低い。日本人教員のように日本語教師養成講座を420時間以上受講して専門的に日本語教育実践を積んできているわけではない。それでは、中国の大学生に日本語を教えるために必要な専門性とは何だろうか。それは、ことばの意味や用法を教えることができるだけでなく、実際の運用場面で自分の伝えたいことを相手に正確に伝え、また相手の話を正確に理解できる力を身につけさせる教授力だと考える。

また、シラバス（教授内容）を作成していないために、学習内容はその都度、教員任せになっている。ゆえに教授内容の柔軟性はあるものの、教員の力量に委ねられる面があることはいなめない。

中国人教員と日本人教員の両者から日本語科目を受講している2年生の学生は、両者の教授方

法の特徴を次のように語っている。かれらの語りを引用しよう。学生名は仮名とする。

王：「中国人の先生は日本人の先生より本の内容を詳しく説明してくれます。中国人の先生はきちんとどこの内容が私たちに難しいかを知っています。」

李：「中国人の先生は教科書にもとづいて教えるが、日本人の先生はもっと自由に教える。」

許：「中国人の先生はいつも自分で全部話します。私たちはメモを取るだけです。日本人の先生は、授業の中で私たちの方に多く話させます。」

陳：「中国人の先生は日本語も中国語も話せるから、学生たちはよくわかります。日本人の先生は日本語で教えますから、聴解に役立ちます。そしてすばらしい日本語を聴くことができます。」

郭：「中国人の先生は文法を重視し、日本人の先生は発音を重視します。」

黄：「中国人の先生は知識を重視します。日本人の先生は実践を重視します。」

インタビューと参与観察から、学生は中国人教員と日本人教員の異なる日本語教授方法を両方とも受けられる学習環境を肯定的に捉えていることが判明している。中国人教員は、自らも日本語学習者であることから、学習者がどのような点に戸惑い、どのようなことが理解できないのかを熟知している。中国人教員が基礎知識（ことばの意味、文法）をしっかりと教えるのに対し、日本人教員は学生がなるべく主体的に授業参加できるように努め、学生たちとのコミュニケーションや会話実践を重視するという両者の相違を学生たちは認識している。中国人教員の場合、中国語を媒介語にして、ことばの意味や文法を教授する。しかし学生は日本語能力向上のためには、学習したことばを運用する能力を実践的に身につけなければならない。それには日本人教員による実践重視の取り組みが欠かせないのである。中国人教員が学生にことばの運用能力を身につけさせるには、中国人教員に対して中国国内あるいは大学内で日本語教員としての専門性を育成する必要がある。日本語教員としての専門性を身につけるためには、高等教育機関におけることばの運用能力育成のための教員研修が重要と考えられる。X大学では、中国人教員と日本人教員両者が教授方法の特性を生かし相互補完的役割を果たすうえにおいて、日本語教育は構築されているといえよう。

### 3 課外日本語活動

それでは、ネイティブ日本語教員ならではの専門性を生かすことで、中国人教員を補助し学習者の日本語能力向上に寄与できる方法はないだろうか。中国人教員とは異なる日本人教員の教授方法を日本語学習により生かすために、正規授業後の課外活動の中で補うことが考えられる。X



大学で行なわれている課外日本語活動が実際にどのような役割を果たしているのかを検討し、より良い活動の方法を考えたい。

日語系では、2010年の試みとして、大学1，2年生を対象に1カ月に2回程度、課外の日本語学習の場が構築された。課外日本語活動を実際に運営するのは、教員ではなく1年生と2年生の学生全員である。課外日本語活動の担当（司会役、準備係等）は、クラスの輪番制となっている。当番クラスがプログラムを決め、必要な備品を用意する。学生は、当番クラス担任の中国人教員と日本人教員に内容や構成、時間配分に関して、その都度相談できることになっている。課外日本語活動は、授業終了後の時間を活用し、授業ではできない日本語活動、たとえばテキストから離れて日本語を使ったゲームや歌、アニメで楽しみ、学生と教員が歓談できる日本語学習の場である。2010年度4月から6月までの日程は表4のとおりである。

表4 2010年課外日本語活動日程

	開催日	内容	担当クラス
1回目	4月6日	スピーチ大会	全クラス
2回目	4月26日	ゲームと歌	1年1組
3回目	5月5日	面接講座(就職対策)	全クラス
4回目	5月17日	ゲームと歌	2年1組
5回目	5月31日	ゲームと歌	1年2組
6回目	6月21日	ゲームと歌	2年2組

#### スピーチ・ゲームの内容

##### 1. スピーチ大会

テーマは「2010年について」

みんなで考え、話し合い、各チームの代表者が口頭発表する。

##### 2. 日本文化に関する問題（○×で答える）

##### 3. 日本語の単語を正しく早く読むゲーム

##### 4. チームを作り、各チームにそれぞれ別のアニメ（日本版）の1部分を見せ、質問に答えさせるゲーム

##### 5. 就職の面接試験での対応の仕方を実践する。

##### 6. 日本の歌（合唱）

ところで、このような課外日本語活動は実際に学生の日本語学習に役立っているのだろうか。参加学生への質問の回答結果は以下のようである。

\*日本語学習の面で役に立ったか。

日本語学習の役に立った	45 (88%)
あまり日本語学習の役に立ったとはいえない	6 (12%)
<hr/>	
	計 51 (人)

「役に立った」という学生に

<どのような点で役に立ちましたか。>

- ・今までより日本語に興味をもつようになった
- ・会話をテキストからではなく、みんなで自由に楽しくできる
- ・学生同士の交流ができる
- ・日本語や日本文化の知識が増える
- ・先生と交流を深めることができる
- ・寮で日本語を話すようになった
- ・新しい単語や文型を覚えた
- ・聞く力が向上した
- ・プログラムの音楽をすべて自分たちで決めてやりがいがあった
- ・発音がよくなった
- ・アニメから日本語を学んだ

「あまり日本語学習の役に立ったとはいえない」という学生に

<どうして役に立ったとはいえないのですか。>

- ・遊びながらなので、本格的な勉強にはならない

課外日本語活動は、平常授業で経験できない学習を行なう場とし、学生が自主的に運営する。それは、日本人との異文化接触における発見や日本語を通じての相互理解の促進と学生の責任感の育成に役立てることができる。学生は日本文化・日本語に関する幅広い知識の獲得のみならず、教員・学生間の日本語を通じての異文化理解および学生同士の日本語で繋がる心的交流を深める機会にもなる。平常授業の日本語科目には学生の実践的な日本語学習が少なく、スピーチや談話力、コミュニケーション能力の向上がはかられる授業はあまり行なわれない。また日系企業への就職活動やスピーチ大会以外に、学生が日本語を実際に運用できる場が少ない。そのため、課外日本語活動では正規授業を補う役割が求められる。多くの学生は、課外日本語活動の参加により、聴解と会話能力、対人コミュニケーション能力の向上に一応の成果が出現したことを認識している。

しかしながら課外日本語活動で学生にプログラムや進行を全て任せてしまっている現状では、学生の回答にあるように「勉強にならない」という意見も出現する。日本語学習方法とプログラムを熟慮し精査した上での活動でなければ、単なるゲーム遊びに終始してしまう危険性を孕んでいることを学生は認識している。それでは、課外日本語活動が正規授業を補う役割を果たすためには、何が必要なのだろうか。

日本人教員がただ見守るだけではなく、企画や運営において積極的な関与を行なうことでコミュニケーション能力や運用力の育成に繋がるのではないだろうか。それは、中国の高等教育機関で採用される日本人教員の場合、日本の高等教育機関や日本語教師養成機関でおよそ2年間以上の専門教育を受けた日本語教師有資格者が多く、臨機応変の会話実践に強みを発揮できるからである。

積極的な関与とは、課外日本語活動の日本語環境で何時間も漫然と過ごさせるのではなく、各課外日本語活動日ごとに明確な学習目標を設け、各活動にはどのような学習効果があるのかをその都度、学生に認識させ理解させることである。たとえば活動の司会ができる、対話力をつける、表現をみがく、質疑応答ができる、プログラムを作成できるなど、毎回、日本語学習の到達目標を具体的にかつ詳細に決めておき、学生が目標に近づけるように教員がサポートすることである。日本語教員は、課外日本語活動において教科書どおりではない自由な会話を学生が行なえるように企画・進行に気を配り、コミュニケーション能力育成に心がけることで日本語能力の向上に役立つように関与したい。課外日本語活動が正規授業を補強する役割を担うためには、ネイティブ日本語教員の教授方法の特性を生かす工夫が求められる。そして課外日本語活動をコミュニケーションとことばの運用力を身につけさせる実践の場としなければ効果的な学習にはならないことを教員は学生に示す必要がある。

#### 4 まとめ

本稿では、中国の高等教育機関の一事例を足がかりとして、課外日本語活動および教員の日本語教授方法との関連性から日本語教育上の教師に関する課題を検討した。調査地の大学では、シラバス（教授内容）が決められていないことから、教授内容は教員任せのフレキシブルなものになっており、教員の力量に負うところが大きい。日本語分野の専門性が低い教員が専攻日本語学習者を教えるにあたり、今後どのように日本語教員として有能な人材に育成していくかという問題も切実である。さらに中国の高等教育機関での専攻日本語学習者が日本語を実際に運用できる場が少ないことも日本語能力向上に関する問題である。

大学の正規授業だけでは補うことが難しいコミュニケーション能力やことばの運用力を身につけさせるためのひとつの方法として課外日本語活動を分析した。課外日本語活動が正規授業を補

強する役割を果たすためには、課外日本語活動に専門性の高いネイティブ日本語教員が企画段階から積極的に関与し、ネイティブ日本語教員ならではのコミュニケーション能力とことばの運用力の育成をはかる教授方法の特性を最大限に生かすことが重要と考えられる。もうひとつは、中国の高等教育機関内で日本語研修と日本語教員の専門的な人材養成がなされることが今後に必要なことである。そのためには、教員の力量任せにしている現状から脱して、日本語教員としての専門性を高める実践的な研修を高等教育機関が継続的に取り組むことが強く望まれることである。

#### 注

- 1) 中国では「満洲国」を「偽満洲国」と呼び、認めていない。しかし「満洲国」はごく一般的に当時の居留民の話をはじめとして日本の文献で多く使われているため、本稿でも使用している。
- 2) 情報技術を使用する教育・学習方法をいう。「e」はelectronicを意味している。
- 3) たとえば国・市など管轄先の相違や大学生の出身地域・民族性、教育予算の配分、日本語教育に関わる教員数等が異なるなど多くの要因がある。
- 4) 『海外の日本語教育の現状＝日本語教育機関調査・1998年＝』国際交流基金日本語国際センター（2000年）による。

#### 参考文献（アルファベット順）

- 愛知大学現代中国学会編（2007）『中国21』vol. 27、風媒社
- 案野香子・谷部弘子（2010）「中国の大学における日本語教育の一側面—湖南省・雲南省における非専攻日本語学習者および教師へのインタビュー調査から—」『静岡大学国際交流センター紀要第4号』同センター、39-56
- フフバートル（2007）「現代中国の言語政策—普通話普及と少数民族語—」山本忠行・河原俊昭編著『世界の言語政策』第2集、くろしお出版、75-108
- ジャック・C・リチャーズ&シオドア・S・ロジャーズ著、アントニー・アルジェイミー&高見澤孟監訳（2007）『世界の言語教授・指導法』東京書籍
- 国際交流基金（2009）『世界の日本語教育から—日本を伝える30カ国の日本語教師レポート』アルク
- 国際交流基金（2008）『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2006年—改訂版』凡人社
- 《日語学と日語教育研究》編集委員会編（2003）『日語学と日語教育研究—記念願明耀教授教40周年』西安交通大学出版社
- 王宏（1991）「中国における日本語教育概観」上野田鶴子編『講座日本語と日本語教育第16巻—日本語教育の現状と課題』明治書院
- 宋協毅（2010）「中国における日本語教育の現状とe-learning教育について—大連地域を中心に—」『東アジア日本語教育・日本文化研究第13号』東アジア日本語教育・日本文化研究会、57-69
- 田中望・斎藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』大修館書店
- 山田陽子（2010）『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』風媒社

（付記：中国語文献および著者名の記載にあたり、簡体字の表記が困難な場合には、やむなく日本の漢字を代用した箇所があります。）

インターネット検索

国際交流基金ホームページ <http://www.jpf.go.jp>

在瀋陽日本国総領事館ホームページ <http://www.shenyang.cn.emb-japan.go.jp/>

(研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2011年5月9日付)